

日本近代政治史における人的ネットワーク分析と 情報学的基盤構築

文学研究科・史学専攻
准教授 池田 さなえ

キーワード：日本近代史、政治史、明治、デジタルヒストリー、生成AI

【研究概要】

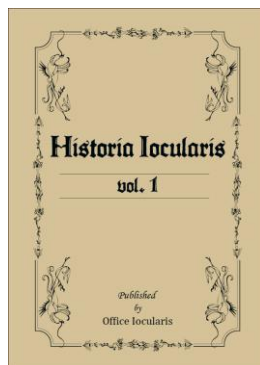
日本史学においては、近年デジタルヒストリーの必要性が認識されるようになってきましたが、日本近代史においては依然として紙の史料集が重要な位置を占め、情報学的基盤の整備が十分ではありません。また、日本の近代史料は膨大で、それを収集し、公開するだけでも大変な労力を要し、個々の研究者がそれらを十分に活用するための方法論の検討が十分追いついていません。

そこで、まずは発信書簡・受信書簡合せて1万点以内の中規模史料群を対象に、以下の2点の研究を進めています。

1. 明治期の政治家・品川弥二郎の発受信書簡を使ったデータ分析と公開
 - ・品川弥二郎発信書簡の所在調査
 - ・matplotlib, pandasなどを使った人物間関係可視化、LDA等による人物間関係・話題分析、品川語コーパスの作成

2. 品川弥二郎発受信書簡を使った「AI品川弥二郎」(通称：帰ってきた品川弥二郎)の開発

同時に、2023年6月に起ち上げた「一瞬笑えて、後からジワジワ考えさせられる」歴史学の論文のみを掲載する学術雑誌『Historia Iocularis』の実践も進めています。これまで、歴史学においては、どうしてイグ・ノーベル賞のような実践が生まれないのかを考え、様々な形で表現してきました。今後は、まず雑誌ではなく論文集から始め、賛同の火を少しずつ灯していければと考えています。



【期待される効果・応用分野】

上記1の研究は、今後品川弥二郎以外の政治家文書にも応用でき、明治期の政治家における横断分析に道を開くものとなるでしょう。また、日本近代政治史における情報学的基盤を整備することで、新たな分析手法の開拓・知見の拡大にも寄与すると考えられます。

更に、上記2の研究で生成AIの開発実績を積みめば、日本近代史における査読支援AIシステムを開発することも可能になります。これは、若手研究者不足や若手の就職先としてのアカポスの漸減、その一方で学会運営など無償の研究外業務の増加、査読の難易度上昇による業績の停滞、査読者・投稿者間の人間関係の悪化といった日本史学における難題を解決する手段の一つとして期待されます。

【アピールポイント】

誰も通っていない道を通るのは勇気が要りますし、傷つくこともたくさんありますが、誰かが踏み固めた道では絶対に得られない喜びがあります。今後は、未来の誰かに「これがあってよかった」と思ってもらえるような研究をしていきたいと思っています。

【関連情報】

リサーチマップ : <https://researchmap.jp/sanooo82/>

Historia Iocularis WEBサイト : <https://www.h-iocularis.com/>

考古学的手法を用いた文化遺産の 地域資源化に関する実践的研究

文学研究科・史学専攻
准教授 諫早 直人

キーワード：文化遺産、地域資源化、古墳、丹後半島、学校連携、博物館連携

【研究概要】

日本各地に約16万基あるとされる古墳、それを含めて47万件以上あるとされる遺跡、それらの中でその学術的価値が明らかとなっているものはごくわずかです。本研究では丹後半島フィールドとして、他の文化遺産に較べて学術的価値が顕在化しにくい古墳などの埋蔵文化財に対して、適切な調査研究をおこない学術資源化すると同時に、それによって得られた知見を学校連携や博物館連携などを通じてダイレクトに地域住民に還元し、地域資源化するモデルケースの構築を地元自治体と共同で進めています。



古墳の調査研究とその学術資源化



学生による学術情報を活かした文化遺産グッズの作成



成果報告会などを通じた学術情報の地域還元



京丹後市立高龍小学校との連携授業

【期待される効果・応用分野】

三次元計測やデジタル高精細撮影など最新の調査機器を用いて取得した研究資源は、文化遺産を地域資源化、観光資源化する際のコンテンツにもなります。文化遺産の調査研究とその成果の活用のサイクルの中で、高度な専門性をもった人材の育成もおこなわれています。

【アピールポイント】

考古学は地域独自の歴史を明らかにすることのできる学問です。地域に眠る文化遺産の学術的価値を掘り起こし、地域を元気にするお手伝いができると思います。

【関連情報】

書籍：諫早直人（編）2025『地域資源としての湯舟坂2号墳』（京都府立大学文化遺産叢書 第33集）京都府立大学文学部歴史学科

研究室URL : <https://kpu-his.jp/>
リサーチマップ : <https://researchmap.jp/isahaya>

中国明代後期における政治と思想の相互関係

文学研究科・史学専攻
准教授 岩本 真利絵

キーワード：中国 明代 皇帝 官僚 政治 陽明学

【研究概要】

中国の明代（1368～1644）は絶対的な権力をもつ皇帝による政治が確立した時代です。私はその政治構造を前提として、そのなかで皇帝や官僚といった政治にかかわる個人がどのような思考を展開していったのか、そして彼らの志向は政治の構造や運営にどのように影響していったのか、その相互作用の有無および内容について解明したいと考えています。特に王朝初期に作られた政治構造や制度が行き詰まりを見せていった明代の後半期を対象として研究を進めています。

【期待される効果・応用分野】

現代の中国を理解するためには、現状分析だけではなく、なぜこのような構造になっているのかという歴史的由来を把握することも不可欠です。私が研究している明代という時代は、まさに現代中国の制度や構造が形成される基礎となった時代です。明代の人々がどのように生きたのかを知ることで、現代の中国が今後どのように展開していくかのヒントが得られると考えています。

【アピールポイント】

前職は別大学の語学担当教員だったので、興味や知識を持っていない学生にいかに興味を持ってもらうかの試行錯誤は重ねてきました。

【関連情報】

著書：岩本真利絵『明代の専制政治』京都大学学術出版会、2019年

論文：岩本真利絵「大礼の議と敕撰書：『大礼纂要』・『明倫大典』における湛若水評価の違いをめぐって」『東洋史研究』82-2、2023年

リサーチマップ <https://researchmap.jp/mariwamoto>

日韓近現代宗教史

文学研究科・史学専攻
教授 川瀬 貴也

キーワード：宗教学、新宗教、朝鮮近代史 ナショナリズム、植民地、ポストコロニアル、宗教社会学、生命倫理、スピリチュアリティ

【研究概要】

狭い専門は「日韓近代宗教史」です。具体的には19世紀中葉以降から現在に至る両国の諸宗教が社会で果たした役割、社会に与えた影響、その独特な思想的意味などを研究しています。とくに植民地期の朝鮮半島における「宗教政策」「日本宗教の植民地布教」「植民地状況下における朝鮮宗教の活動」「朝鮮宗教を巡る学知」を中心に研究してきました。宗教とナショナリズムの関係を常に心にとめて研究しているつもりです。近代とは「宗教の影響力が減っていく時代」を指しますが、それでも宗教はなくなりませんでしたし、それどころか新しい宗教もたくさん誕生しました。その存在理由を考えています。

【期待される効果・応用分野】

文化交流

【アピールポイント】

19世紀中葉から現在に至るまでの日本と朝鮮半島の近現代史、宗教史、思想史についての知見を提供できます。

【関連情報】

主な書著

『植民地朝鮮の宗教と学知—帝国日本の眼差しの構築』青弓社、2009年（単著）
『近代日本宗教史 第四巻 戦争の時代：昭和初期～敗戦』春秋社、2021年（共著）
『これだけは知っておきたい統一教会問題』東洋経済新報社、2023年（共著）

リサーチマップ <https://researchmap.jp/t-kawase>

西洋近現代史

文学研究科・史学専攻
教授 川分 圭子

キーワード：イギリス、カリブ、近代、現代、海外進出、植民地支配、砂糖生産、
熱帯農業、強制労働、奴隷、契約労働者

【研究概要】

16世紀以来の西洋のアメリカ、カリブ諸島への海外進出、プランテーション型植民地としての開発、労働体制、脱植民地化以降現代の社会、経済への影響。砂糖生産については、ハワイなど太平洋地域、南アフリカにも研究を広げている。

【期待される効果・応用分野】

旅行会社等への情報提供

【アピールポイント】

欧米では西洋の海外進出の現代的影響についての検証はすでに始まっており、歴史学と現代政治・経済を連続的に調査する研究は増加しているが、日本では本研究者以外着手している研究者はほとんどいない。

【関連情報】

リサーチマップ <https://researchmap.jp/read0049225>